

(続紙 1)

京都大学	博士（地域研究）	氏名	内藤 直樹
論文題目	北ケニア牧畜民アリアールの開発・移動性・アイデンティティに関する民族誌的研究		
(論文内容の要旨)			
本論文は、ケニア共和国の北部に住む牧畜民アリアールを対象に、東アフリカ牧畜社会における在来の生産様式の現代的な再編過程を総合的に解析し、今後の開発＝発展の方向性について考察したものである。 東アフリカ牧畜社会の人びとは、つよく乾燥した地域に居住し、家畜を媒介として利用可能なエネルギーを獲得する在来生業を営んできた。1970 年代以降には、各国政府や国際機関によってこの地域で実施された開発計画は、在来の生産様式の社会生態学的な特性を無視した介入を継続した結果、環境破壊や貧富の差の拡大といった負の影響をおよぼしてきた。近年には、市場経済への統合、学校教育の普及や国家の司法・立法・行政システムへの包摂といった外部からの影響を受けるなかで、在来の牧畜のあり方は大きく再編されつつある。たとえば、人びとは生計維持手段を多様化し、新たな資源やサービス、情報へのアクセスの道を創出している。しかしながら、この社会の開発＝発展が今後、いかに実現されるべきなのかについては明確な方向性が見いだされていない。本論文は、人類学的な手法をもちいて牧畜社会の発展にかかわる課題に正面からとり組んでいる。 第 1 章では、先行研究のレビューをおこなってこの研究の目的を明確にした。そして、調査対象であるアリアールは、隣接するウシ牧畜民サンプルとラクダ牧畜民レンディーレの境界域において複合的で重層的な民族アイデンティティを維持していることを記述した。アリアールが近隣の諸民族との関係においてこうしたポジションを占めていることは、他民族との相互扶助関係や生態資源へのアクセスを保証している。 第 2 章では、アリアールの民族やクラン・アイデンティティの重層性・複合性を、この地域で実施された開発計画との関連において論じている。調査村は 1980 年代におこなわれた開発プロジェクトの影響下で新たに形成されたコミュニティであり、移民を受け入れて拡大した。その過程でアリアールは民族帰属に関する在来の論理を柔軟に駆使しつつ、他民族や他クランに属する移民を包摂している。			

第3章では、生活史に関する資料にもとづいて、民族境界を越境する移住の動機を記述・分析している。調査地域には、開発プロジェクトの影響によって形成された複数の町があり、そこには多くの貧しい牧民が集住している。しかし近年、これまでにこうした町が担ってきた機能が牧畜集落でも享受できるようになったことにともない、町の貧困世帯が牧畜集落に再移住している。第4章では、アリアールの遊牧の社会生態学的な特徴や、生態資源へのアクセスについて論じている。アリアールの生計維持単位は、父系の近い親族を核として、姻族や友人をふくむ社会関係を基盤として構成されており、集団主義的な適応戦略をとっている。こうした姻族関係や友人関係は、放牧キャンプにおいて他民族が管理する水資源や放牧地にアクセスする際にも重要な役割を果たしている。

第5章では、在来の牧畜生産が市場経済に統合されるなかで、小家畜がもつ経済的な利点がつよく認識され、保有家畜種の構成比や生計維持戦略が変化していることを論じている。人びとは家畜市を利用して小家畜と大家畜の交換を積極的におこない、生業の多角化を図っている。

第6章では、2007年におこなわれたケニアの総選挙が、この地域の人びとの集団間関係やエスニシティにどのような影響を与えたのかを記述している。このときに国会議員候補者は、選挙運動において民族主義的な言説を強力に利用したために、近隣民族間やアリアールのクラン間の差異と対立関係が強調され、従来の共生的な社会関係に深い亀裂が生じている。

第7章では、在来の牧畜生産様式が外部からの影響のなかで再編される過程を総合的に解析し、今後の開発＝発展の方向性を考察している。もともとアリアールの生産様式は、父系親族のみならず姻族や他クラン・他民族の成員との互酬的關係によって成立していたが、こうした傾向は、開発プロジェクトの影響で形成された新たなコミュニティにおいても顕著であった。その一方で、近年の政治的民主化と地方分権化にともなう民族主義の台頭は、これまで複合的・重層的だった集合的なアイデンティティを本質化し、その結果、越境的な家畜の交換や遊牧的な移動・移住が制限されている。すなわち、牧畜社会の開発＝発展のためには、複合的・重層的なアイデンティティにもとづく他者との互酬的關係を維持することが重要である。

(論文審査の結果の要旨)

本論文は、ケニア北部のアリアル社会を事例として、いったん牧畜をやめて定住化した人びとが再牧畜化する現象に関する民族誌的記述をおこない、牧畜という生産様式を現代的な文脈のなかで再検討して、その開発＝発展の可能性を考察することを目的としている。

東アフリカ牧畜社会の人びとは、予想不可能な気候変動や伝染病の流行、家畜の略奪といった問題に対処するために常に移動し、一時的には牧畜をやめてほかの生業に依存することもあった。1970年代以降にこの地域で実施された開発計画では、牧畜民による過放牧が環境破壊をひき起こしているという見方にもとづき、家畜数を減少させて放牧圧を減らすことを目的として定住化プロジェクトが導入された。しかしながらこうした介入は、町への人口集中や資源をめぐるコンフリクトを増幅させるなどの負の影響をもたらした。そのために現在、牧畜民の移動性や柔軟な問題処理能力を活用した新たな開発＝発展の道が模索されているが、明確な方向性は見いだされていない。本論文は、アリアル社会の事例分析をとおしてこの課題にとり組んだ意欲的な研究である。

本研究の重要な学問的貢献のひとつは、この地域の牧畜社会における開発＝発展のためには、人びとの複合的・重層的なアイデンティティを基礎とした互酬的な社会関係を活用することが重要であることを、豊富な事例にもとづいて示したことである。本研究の調査対象であるアリアルは、複数の民族の地理的・社会的・文化的な境界に位置しており、民族や出自集団への帰属に関してフレキシブルでダイナミックな態度と論理を有している。また、生産活動を組織するためには、父系の近親親族を核としながらも姻族や友人を柔軟に組み込んでおり、そのことによって牧畜にかかわる生態資源へのアクセスが確保されている。本研究は、アリアルの人びとが開発やグローバル化の影響をつよく受けながらも、複合的・重層的なアイデンティティを援用しつつ、生業基盤を再構築していることを明確に提示したが、これは地域研究の大きな貢献である。

本論文の第二の貢献は、アフリカの牧畜社会で進行している定住化という現象を、定住した非牧畜セクターだけに注目するのではなく、移動を続ける牧畜セクターをふくむ社会全体に作用するプロセスであると把握する視点を確立したことである。アリアルの人びとは、外来の定住化プロジェクトがもたらした資源を利用して、逆に新たな移動牧畜のコミュニティを構築していたし、こうした新たなコミュニティは町の貧困世帯が牧畜セクターに再参画するための受け皿となっていた。また、町に新設された家畜市は民族間の家畜の交換を活性化させる場となり、家畜を失った牧畜民による家畜群の再構築を促進し

ていた。すなわち人びとは、ふたつのセクター間を柔軟に移籍しつつ、生業を再編していた。本論文は、定量的・定性的な資料を詳細に提示しつつ、定住－移動、牧畜－非牧畜という二極の連続体のなかに生業の再編過程を位置づけている。

このように本論文は、現代的な文脈の中で牧畜という生業が再編される過程を総合的に分析することをおして、グローバル化の進行という新しい事態に対して、人びとが主体的に採用している融通無碍な対処の過程を明らかにした。アフリカ諸国を対象としたさまざまな開発計画が期待された成果をあげていない現在、対象社会に埋め込まれた在来の問題対処能力を抽出して、それを積極的に活用するアプローチが注目されている。本研究が、現在の東アフリカ牧畜社会で進行している定住化という状況をふまえたうえで、人びとが在来の論理を柔軟に駆使しつつ生業基盤を再構築している実態を明らかにし、それを開発＝発展の可能性のなかに位置づけたことは、高く評価することができる。

よって本論文は、博士（地域研究）の学位論文として価値あるものと認める。また、平成 21 年 1 月 20 日、論文内容とそれに関連した事項について試問した結果、合格と認めた。

論文内容の要旨及び審査の結果の要旨は、本学学術情報リポジトリに掲載し、公表とする。特許申請、雑誌掲載等の関係により、学位授与後即日公表することに支障がある場合は、以下に公表可能とする日付を記入すること。

要旨公開可能日： 年 月 日以降